
下らない

ＺＺＺＺ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

下らない

【Nコード】

N1277M

【作者名】

zzzz

【あらすじ】

下らない下らない下らない下らない下らない下らない

彼は小学3年生の頃に、いじめが原因で不登校になりました。

母親は彼を甘やかしますが、父親は厳格であるもの子供の事には無関心で面倒事は全て妻に任せるというものでした。それにより彼は自宅学習という特例措置を受けて学校へ通うことなく義務教育を終えます。

ですか、彼には学習障害という障害がありました。学習障害は当時としては認知されていない類の物で彼自身も、また誰一人として、その障害に気がきませんでした。

この障害は、その名の通り学習するのが困難な体質であり障害なのですが、彼は成長するに従って障害がより強いものへとなっていました。

彼は母に愛されていると思っていました。

また母も彼を愛していました
ですが母の愛は強すぎました。

母は彼が学習障害である事に気付かず皆に遅れを取らない様に必死で勉強を教え込もうとします。

その甲斐があつて彼の学力は同世代のそれと比べて高いのですが、時間が経る毎に障害が悪化し、新しい事が覚えられなくなっていき
ました。

学力は同年代の子らに、いつの間にか追い越されて彼自身も母親もその事に絶望しました。

ですが母は彼に、その絶望する自分の姿を一切見せませんでした。

外の世界と一切の交流が経たれて約3年が経ちました。

学校へ通えば中学1年となる時期になりました。

この頃から父親が彼に関心を示し始め学校を行かせる様に手続きを始めました。

理由は初対面からならば新たな友達が出来て、集団の輪に一から入る必要も無いと感じたからです。

しかし、上手くはいきませんでした。

彼は自分を周囲と比べる事により劣等感を感じる様になりました。それにより不登校児へと戻るのですが、父親はそれを談じて許しませんでした。

彼は学校で友人も作れて、それなりの形で社会に溶け込めていたのです、今、その道から逸れるのは悪い事であり逃げと判断したのです。彼も母もそれが正しいと思ひ同意しました。

しかし、父親は仕事柄、朝家にはいません。

彼が朝、必死で学校を休みたいと母親に懇願すれば願いは叶います。学校の理解できない勉強よりもマイペースで勉強した方が身になると判断した母親は、彼の言いなりになりました。

しかし、頑張っても学力が身に付きません。

あの手この手で試行錯誤しましたが母親も疲れ果てストレスがたまり諦めました。

学力の無い不出来な子として認め学校に行かせようとしています。

母としては学力が無くても社会適応できればどうにかなると思うに至ったのです。

でも、彼は自分を不出来な子として認めたくなかった。

散々、努力して勉強したのに身に付かないのは、彼が一番気にしていたからです。

プライドと自尊心がズタズタの状態では登校するのだけれど、勉

強しか知らない彼は友人とは何も話題が合わない事を知りました。何を言葉にしても自分から気を使うばかりで、何処にも居場所がありません。

周囲の楽しそうな友人の輪を見る度に羨ましく思うも、どんなに頑張ってみても、そのらしい関係が作れないのです。

その苦痛に耐えかねて彼の不登校がまた始まります。

泣きすぎる彼を母親は甘やかしますが、同時に子供の将来に対しての不安を募らせていきました。

その不安を母は父に相談をしました。

父親は彼と話をしました。

どうして学校へ行きたくないのかを聞き、なぜ行くべきかをとことん話しました。

でも彼は自分の学校での苦痛を言葉に出来なかった。

勉強も駄目で人間関係も駄目等という親不孝で否定的な現実をどうしても認めたくなくて親に話せなかった。

彼は泣くばかりで会話の無い状況が続き父親を激怒させます。

その日の彼は説教をされて眠りにつきました。

翌朝、父親は無理やり彼を学校へと行かせようと引っ張り出そうしました。

しかし、彼はそれに断固抵抗します。

モノに対して八つ当たりをしました。

彼は、そんな事しかできない自分が余計に情けなくて、情けない自分を両親に見られているのが悔しくて、でも、そんな自分を認めるのに納得できない。

彼は自分を同処理して良いか判りませんでした。

パニックになり八つ当たりをする度に、今の自分の状況を受け入れられずに、パニックがエスカレートします。

その結果、八つ当たりもエスカレートして、八つ当たりがエスカレ

ートする度に更にパニックに拍車を駆けます。

テーブルの食器はグチャグチャに散乱して、その姿を両親は呆然と見ていました。

日頃大人しい彼からは、想像も付かない光景だったのでしょう。

その暴れる彼を止めようと母親が力づくで抑えようとしました。

その拍子に彼は母親を突き飛ばしました。

母は気絶しているのか動きません。

彼は、自分のした結果を目の当たりにした瞬間に自分を殺そうと決意しました。

台所の包丁を手に取り死のうと試みたのですが、父が止めに入りみもみあいになりました。そして父親も突き飛ばしました。

その拍子に父も母と同じように気絶しました。

唯一違ったのは、父親の腹部に包丁が刺さっていた事です。

彼は包丁を抜き取った後に、父を殺したのを自覚しました。

母は、まだ、生きているかもしれないと思う彼は、それでも自分が父親を殺したという最悪な事実だけは母に知られたくなかった。

彼は母親にこの不幸の現実を知らずに居て欲しい。

そう思い彼は母を殺しました。

彼は何度刺したか判らない程刺した。

刺せば刺すほど自分が何をしているのか判らなくなってパニックを起す彼は、

死の基準が何処にあるのか判らなくて、泣きながら何度も刺したのです。

彼はその後、自分で自殺を図ろうとしましたが、どうしても死ねなかった。

逃げる様に家を飛び出し、日が暮れた。

行く当ても無く結局、家に帰ると、そこで警察に逮捕された。

通報したのは父親だった。

父は氣絶してただけで、重症であったものの一命は免れていたのです。

彼が親を殺したその時、13歳。少年法と障害が考慮されて罪は軽く、5年で少年院から出所した。

彼は父親と会って話をしました。

自分がなぜ、こんな酷い事ができたのかを話した彼は父に受け入れられた。

全てを受け入れられ、それでも許してくれる父の存在は彼にとって大きくて、だけど、それ以上に自分のしでかした行為に罪を感じた。父親の愛を感じれば感じる程に、母を殺した事を自覚せざる終えない訳で、その苦しみから逃れる為に、何度も自殺未遂をした。けれど、その都度、父が止めに入り彼は生きていた。

父は何度も言いました。

「お前が生きているだけでいい。」と……

ある日、彼は自己分析をしている内に、この小説みたいな話を書いてしまった。

そして

「小説家になろう」に来て出来心で、この話の一節を投稿しました。

すると絶賛する読者が一人現れ、その人と友達になりました。

彼はその人の事が好きで、その人の小説を読む内に次第に自分も小説らしいものを書きたいと願うようになった。

彼は沢山の小説を読み書き、日々を現実逃避していたら、沢山の友達ができてしまっていた。

友達と付き合う内、自分が必要とされている事を感じた彼は、自分の立場を思い出しました。

『好かれる様な人間じゃない』『人を好きになって良い人間じゃない』と……

それからというものの、友人と交流する度、親を殺した時の恐怖と罪悪感が蘇ってしまいました。

その苦しみに耐えられなくなった彼は自問自答を繰り返した。

その結果『嫌われたい』『恨まれたい』その方がきつと楽であると、そう考える様になりました。

そして、彼は人に忌み嫌われる様な愚かな行為を始めた。

だけど、彼の優しさを既に知ってしまった者には全く通用しなかった。

ある程度は彼らと離れる事ができたけれど、彼自信は人が好きで必要としていた。

現実世界で友達が居なかった彼にとっては、ココは憩いの場であって、

どうしてもココに来て、つい皆を見てしまう。

その都度苦しみを思い出してしまう彼は逃げた。

誰とも交流を交わすことなく逃げ続けた。

でも、駄目だった。

思い出を消す事は彼には無理だったのです。

つらそうな人を見てしまうと、つい、励ましたくなって声を掛けてしまう。

しかし、その都度嫌な記憶が蘇る。

彼は思いました。

『せめて、誰かを傷付けずに恨まれる術があったなら、自分が必要とされるなんて思わない。そしたら少しは苦しまなく済んだのに……』

そう思った彼は最後に友人に聞いた。

『誰かを傷つ付けずに恨まれる方法ってないのかな？』
でも、そんな方法は、ありはしなかった。

嫌な記憶を思い出し自殺未遂を繰り返そうとしてしまう彼は、その都度、父を困らせます。

その都度、2人は苦しくて苦しくて……でも、ようやく晴れた。

彼の父親は病気で死んでしまいました。。

残された彼の自殺を止める者が誰も居ません。

これ以上苦しまなくて良いと理解した彼は父の後を負う様に自殺へと向かいます。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1277m/>

下らない

2011年1月3日18時47分発行